

目黒稲門会会報



(題字：眞仁田 勉 初代会長)

第93号 2021年12月

発行人：後藤 克彦 編集長：猪名川 一雄 事務局長：吉野 博明
事務局：〒153-0053 目黒区五本木2-22-6 Tel 03-3713-1684

2022年新年会のご案内

2022年新年会を、1月16日(日)ホテル雅叙園東京にて下記の通り開催いたします。

コロナ禍下の初めての対面による新年会を迎えるにあたり、更なる飛躍を誓う方、時代の節目に思いを馳せる方、1年を無事に過ごしたことへ感謝される方、各々の新年があろうかと思いますが、同じ早稲田で学んだご縁を通じて集いましょう。

2022年、2年ぶりの対面による新年会を迎えます。おなじみの方も、ひさしぶりの方も大いに飲み、語り、皆で「都の西北」を高らかに歌いましょう。新年を祝うとともに、皆様の更なるご活躍を祈り、楽しいひとときを過ごしたいと思います。

今回、浅海敏之相談役(1959年政経卒)により、「早稲田とのご縁」と題した講演を予定しております。豊富な目黒稲門会活動の経験をお持ちの浅海相談役ならではのお話、どんな講演を伺えるか楽しみです。どうぞご期待ください。

講演の後には、懇親会にてゆったりと会員相互の交流をお楽しみ頂けます。皆様には新年ご多用のこととは存じますが、お誘い合わせの上、多数ご参加下さいますようお願い申し上げます。

記

1. 日 時：2022年1月16日(日)16時開会
(受付開始 15時30分)
2. 会 場：ホテル雅叙園東京3階「華しずかの間」
東京都目黒区下目黒1-8-1
3. 講 演：16時～17時 講師 浅海敏之氏
演題 早稲田とのご縁
4. 懇親会：17時～19時
5. 参加費：会員10,000円、ご家族5,000円
当日参加費をお支払いください。
6. 申 込：2021年12月28日(火)まで

※コロナ禍の状況により、対面方式よりオンライン方式に変更する場合がありますのでご了承をお願いします。
(吉野 記)

講師プロフィール



浅海敏之氏

- 1936年 目黒区中目黒生まれ
- 1952年 早稲田中学校卒業
- 1955年 早稲田大学高等学院卒業
- 1959年 早稲田大学第一政治経済学部卒業
- 1998年 目黒稲門会設立準備委員会委員
- 1999年 目黒稲門会初代幹事長就任
- 2001年 第1回奥島総長杯ゴルフコンペ優勝
- 2010年 目黒稲門会会長代行就任
- 2011年 目黒稲門会相談役就任
- 現在に至る

講師の浅海氏は、1998年6月校友会よりの要請を受け、設立準備委員会を設置。13回の委員会・世話人会を繰り返し、会則案・役員候補等を決定しました。

1999年、目黒稲門会初代会長に眞仁田勉氏(1953年法卒/元東京都副知事)を迎え、以降、第2代加藤榮護会長および第3代八幡和三郎会長のもと、幹事長として大変活躍されました。

2010年八幡会長が任期中に他界された後、会長を代行、設立10周年定時総会・祝賀会を盛大に実施し、第4代大野利幸会長へバトンタッチしました。

講師の浅海氏は、これまでの歩みを振り返り目黒稲門会の部会活動を中心に、趣味の活動を通して地域の早稲田大学校友間での交流を深め、充実した生活を目指すことの大切さを中心に興味深いお話が伺えるものと思います。

(金井 記)

各 部 会 か ら の 案 内 ・ 報 告

俳句部会

第137回「俳句部会報告」

日時 2021年10月11日(月) 郵送句会

(順不同)

川井素山	藤棚の聞くともなしに秋風鈴 (芝離宮にて)
保井寶正	赤蕎麦の花でもてなす信州路
佐久間喬	走り蕎麦軽き会釈で丸太椅子
丸山酔宵子	杉玉の陰に巢残し秋燕
吉田啓悟	去ぬ燕領事一人の領事館
青木英林	落花生土の香微かに茹で上がり
山本草風	ああ今我は熟柿の如くなり
佐久間たか子	重たげに陽より紅熟柿かな <small>くれない</small>
渡辺鯨波	テレワーク飽きて勤労感謝の日
後藤克彦	柿熟るる空き家の塀の高きかな
原 晶如	手のひらに受けて熟柿の重さなほ
青葉ひかる	野わけ去り凜と輝く葉のしずく
永井正孝	木犀のかおりの案内夕間暮れ
金森純女	風神の足裏白き芋嵐

<中原主宰の短評>

杉玉の陰に巢残し秋燕

酒屋さんの杉玉に巢を発見した。店先が汚れるので何かその対策はしたようだがー発見がこの句のすべて

落花生土の香微かに茹で上がり

生落花生を茹でるのも旨いよねーということで土のにおいは当然土の中のものだからするだろうけど

ああ今我は熟柿の如くなり

グデュグデュゲル状態だという頭の中。体の中だとどうということになるか

テレワーク飽きて勤労感謝の日

リモートの何か馴染めないうちに終了となるのも。リアルで対面の方がやっぱり仕事も早い

柿熟るる空き家の塀の高きかな

なんとかして塀が低ければ柿が盗めるー昔ならよく盗って食べた。空き家だからおとがめなしという気分なのだが

手のひらに受けて熟柿の重さなほ

硬いときの柿の重さと熟柿となったときの重さには

変わりはないのだが。(なほ)で上手く逃げている

野わけ去り凜と輝く葉のしずく

雨風をもたらす台風だからーその直後は万物を濡らしている。凜とはその気分はある

木犀の香りの案内夕間暮れ

香りがそこまで案内するというそれも日中でなく夕方暮れようとしているときの鼻腔のたのもしさ

風神の足裏白き芋嵐

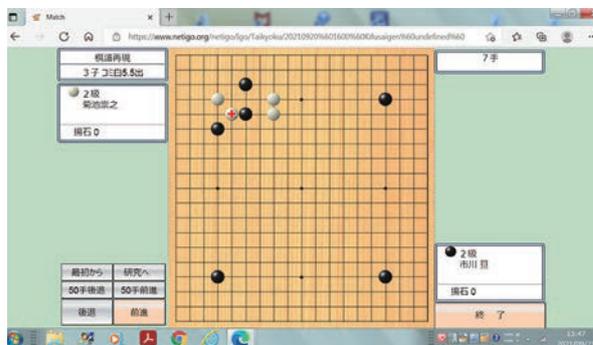
風神(架空のもの擬人化)の足裏ー(ひっくり返すと植物の葉裏が白いのだが)里芋。葛などー発見の妙

俳句部会長 佐久間 喬

囲碁部会～9月よりネット囲碁で再開～

皆様、コロナ禍の下如何にお過ごしでしょうか。囲碁部会は2021年9月よりインターネットの「呼びかけの碁」を使用して囲碁部会を再開致しました。

また、同年10月より、8名によるリーグ戦を開始致しました。その「呼びかけの碁」の一例の画面は以下の如くです。



囲碁には興味はあるが、始めるにはハードルが高すぎる、と思っている方はいらっしゃいませんか？

囲碁部会としては今後の取組として、「呼びかけの碁」と Zoom を使った囲碁の入門者向けの研修会を考えています。内容的には置き碁では必須の星の定石を中心とする勉強会と13路盤を使った入門者同士の対戦です。13路盤は19路盤(上の例)と違って入門者の方には解かり易い碁盤です。勝負も短時間でつきます。PCをお持ちの方であれば誰でもご参加できます。

二人以上ご興味のある方がいらっしゃるようなら、開催致したいと思います。市川までお気軽にご連絡下さいませ。

囲碁部会長 市川 亘

思い出すまに

柳田幸男（昭和31年 法）

早稲田大学に入学した経緯

私は、1933(昭和8)年に富山県黒部市若栗で生まれましたが、子供のころ体が弱く、高校に入っても病気で休学しなければならないほどでした。登校を再開後、周囲の学友たちと同じように、できれば地元を出たい、東京へ行ってみたいと思うようになりました。しかし、私が東京で勉強したいと言い出すと、父母から猛反対されました。「身体が弱いお前のことだ、東京へ行けば、病気になる、生きて帰ってこれない。だから絶対に行ってはいけない」と言うのです。そのとき、「いいじゃないか、行かせてやれ。好きなことをさせてやって、うまくいかなかったら、そのときじゃないか」と両親を説得してくれたのが、一緒に暮らしていた祖父でした。

そもそも私は早稲田大学法学部に入るようにこの祖父から背中を押されていたのだと、今でも感じているのです。祖父は隣村の有倉家と大変親しくして

いました。その家のご子息は、早稲田大学法学部の有倉遼吉教授(憲法)でした(読者の多くも同教授のお名前をご存知でしょう)。ですから、祖父は、早くから、私に早稲田大学法学部を受験させようと考えていたのではないのでしょうか。私は祖父に言われるままに早稲田大学法学部を受験しました。



1956年
早稲田大学法学部卒業

涉外弁護士になった経緯

私は、1960(昭和35)年に弁護士になり、以来60年、企業の国際的業務などへのリーガル・アドバイザーを中心に活動してきました。駆け出し時代は、国内の訴訟案件を中心としていたのですが、そのころ黒部市若栗の自宅に帰省するたびに父から「これからの時代はアメリカに行って勉強してこないと、一人前にはなれないぞ」との強い助言を受けました。父は、そもそも私の体を心配して東京に出て勉強することにさえ反対していたのに、私が健康を損なうことなく弁護士になったら、頻りに留学を進めるようになったのです。おそらく、雑誌や新聞でア

メリカの弁護士のことを読んだためと思います。私は、当初はアメリカになど行けるわけがないと思っていたのですが、父の話を知っているうちにその気になり、学生時代にお世話になっていた有倉遼吉先生に相談するなどして準備を進めるようになったのです。幸い、早稲田大学総長だつた大濱信泉先生や司法研修所で教官だった服部高顕先生(後の最高裁長官)のご助力(推薦状)を得ることができ



1966年
ハーバード・ロースクール
卒業

て、1965(昭和40)年、ハーバード・ロースクール(以下HLS)のLLM(法学修士)コース(1年間)に入学することができたのです。

HLS卒業後は、1年間、サンフランシスコにあるアメリカの法律事務所研修させてもらい、帰国後、徐々に国際的的案件が増えていったのです。

早稲田大学理事

私は、2010(平成22)年から2014(平成26)年まで、早稲田大学の理事を務めました。

理事就任にあたっては、当時、新しく早稲田大学総長になった鎌田 薫教授が自ら私の事務所を訪ねてこられて要請されたのでした。私は、1991(平成3)年から1年間、HLSで客員教授を務め、その後もハーバード大学やHLSに関わる2、3の役職(委員)に就任し、HLSの改革をすぐ近くから見ることができましたし、こうした経験を基に、1998(平成10)年以降、法律雑誌などに日本版ロースクール構想を発表していました。鎌田総長は、このような私の経験に鑑みて、この理事就任要請をされたものと思います。しかし、私はそのとき70代も半ばを過ぎており、予想していなかったために少し戸惑いました。それでも、1年でもいいからとおっしゃるのでお引き受けして、結局4年間務めました。理事会では、同じく理事の澤部 肇さん(TDK株式会社元社長・会長。現在、早稲田大学評議員会長。一昨年、日経の「私の履歴書」に書かれた澤部さんの活躍を読まれた方も多いと存じます)の隣の席で、いろいろとご教示を頂戴しました。澤部さんとは、時には理事会外でもお会いしてご意見をお聞かせ頂くなど、大変お世話になってきました。

当時の早稲田大学は、鎌田総長のリーダーシップのもと、大学の改革案作りに取り組んでいました。定例の理事会のほかにも、「理事会集中討議」と称する

会議が開かれ、鎌田総長ほか関係者の皆さんと土曜日や日曜日に早朝から集まって、お昼もろくに食べずに一日がかりで改革案の文案や早稲田大学の教育・研究・財政など改革に関連する諸事項について熱い議論が交わされました。改革案の議論に際しての私自身の基本的なアイデアは、ハーバードでの経験から、学部レベルでは一般教養を修得し、専門的な知識は大学院で修得することが望ましく、早稲田大学もそういう形に持っていくべきだというものでした。

こうして出来上がった早稲田大学の長期的改革計画が「Waseda Vision 150」で、現時点においても早稲田大学の大学運営の基本的な方針として堅持されています。

おわりに

振り返ると、祖父の一言がなければ早稲田大学に入学することもなく、今頃どこで何をしていたらと思うのです。早稲田大学に入学しなければ、弁護士にもならず、HLSに留学することもなく、後年、早稲田大学総長と話をする機会さえなかったと思います。父の助言を含め、身近な者や周囲の方々からの助言や助力のありがたさと、澤部さんなど早稲田大学との機縁の深さをつくづくと感じ入る次第です。

趣味は中世の土の城

木村昭一（昭和37年 商）

戦後の一時期を除き、日本資本主義の父？ 渋沢栄一翁のお陰で最近では少し知られるようになった現埼玉県深谷市で生まれ育ち高校は熊谷高校でした。

1年のとき島崎藤村の落梅集・「千曲川旅情の歌」に惹かれて長野県小諸市の古城・小諸城（懐古園）へ、「城って!」。ところが高校と大学と実社会の8年は登山とスキーに溺れて「城」は何処かへ。

30歳の時に中小企業診断士に合格し商売替え、今に至る50年余り地場の中小建設業のアドバイザーとして北海道から沖縄までドサ廻り。その間に眠っていた「城」が目を覚まし、仕事の合間に全国のいわゆる「お城」を殆ど歩きました。

城郭建築の粋：美しい多層櫓や多間櫓、荘厳な城門、水濠に映える石垣・・・、殆ど織豊（織田豊臣）時代以降の人の眼を楽しませる美しい「お城」は全国に余り多くないので何年もかかりませんでした。

60歳すぎに第3の人生のため仕事を抑えパソコンを始めたのを機に「お城メーリングリスト」に参加、会員は「歴史もの」、「戦国もの」、「お城もの」の著者や「人物往来」や「歴史街道」の執筆者など多士済々、「なんと！ハイレベル!」と驚きつつ、「お城」の前の時代のいわゆる「中世の土の城」が数万あること、かつて各地に跋扈した土豪が

己の領地・家・命を守るべく自然の山地に施した知恵を探索する面白さを知りました。

私がメーリングリストに参加する何年も前から「中世の土の城」探索の魅力を見出し実際に歩いた結果を纏めた優れたホームページで我々を指導して下さる先人には頭が下がり、オフ会での出会いやネット上での情報交換。新たな知識や情報で「中世の土の城の探索」に対する気持ちが更に高揚しました。

それを期に歩きたい候補が急増、先人のHPから面白そうなのを拾い出した「中世の土の城」の珠玉編、折から日本城郭協会が（学術的見地から選び？土の城は約3割）が発表した日本百名城と重なって、「これから忙しくなるぞ」。

北海道のアイヌの遺構・チャシから本州、四国、九州の土の城、特に長崎県は五島・壱岐・対馬まで、更には沖縄はグスク巡り、家内に言わせれば「病が篤くなりましたね」。誰かと一緒だと予定の擦り合わせが面倒なので殆ど一人で歩きました。

時には出掛けた先の会員の方にクルマと案内で面倒かけたり、近場の時は何人かでオフ会、今でもその時の仲間とのお付き合いが続いています。いつも私が最年長、同好の若い人たちは年寄りを大事にしてくれます。当時は「安土城へ・・・」にタクシードライバー「安土山に城は無いよ。町が城を建ててくれれば客が来て助かるんだがね」。信貴山城の弾正屋敷で2人の女性が「お城、どこですか?」、「ここが信貴山城の中心です」と答えると「お城って、あの恰好いいおうちじゃあないんですか?」、当時の「お城」は天守の意が普通でした。こんな時期に「趣味は山城」と言う「山城?山の中をガサガサ歩くアレ?何が面白いの?変わってるね」は当然でした。

日本百名城やその後の土の城が7割の続日本百名城のお陰?前は殆ど出会う人が無かった山城も最近ではよく人と遭うようになり、城道の整備も良くなり、たまにはテレビでも山城番組が・・・、ブーム?お世話になった「お城メーリングリスト」の休止と仕事に一区切りつけるのとで68歳の時にブログ「老コンサルの残日録」を開始。最初の目的は「お世話になった中小建設業の次代を担う若人のために」だったのですが、メーリングリストが休止になり山城散歩の喜びを表す機会がなくなったので徐々に「山城ブログ」に。元々のパソコン下手でメーリングリストでもよく炎上、何とか「山城ブログ」の体をなすのに数年かかり、まずまずになったのが2009年のころでした。

15歳の夏から82歳の夏の67年間、足跡を刻んだ城の数は2000に近いと思いますが、従ってブログに載っている「中世の土の城」はざっと1000位

かも。戦国末期の織田信長の台頭で戦の主流が鉄砲に変わる前の「中世の土の城」、「城という字を分解すれば土で成るのを城という」、美しいものです。

人により「城」の楽しみ方は様々ですが、私は「何処から攻めても攻城軍を撥ね返す縄張」を現地で見歩いて、攻める側と守る側の両面から眺めること。ブログは各々の城の説明は先人のHPなどに任せ、歩いた順に画像を並べています。

感動したシーンは幾つもありますが、例えばパソコンで「老コンサルの残日録」を検索、開いたら適当なブログを開き、日付上の「ブログ画像一欄を見る」をクリック、夥しい画像の上の「年と月」を操作して2010年4月の画像にカーソルをあて画像の下に出る「1033」をクリックすると・・・対馬の金田城の「防人の住居跡」が出るでしょう。ぜひ…。



対馬・金田城



浅茅湾を望む
湾に近い下の方には1300年
以上まえに積んだ石垣がまだ
そのままの姿で



二の城戸
画像の先の方は崩れた石が
散乱、手前は復元したもの

私の健康の秘訣は「知識と経験と想像力と体力を総動員」、常に「頭と体と心に刺激を与え続けること」。遠くへの遠征は別にして体調体力脚力に合わせた「近場の中世の土の城の散歩」は気軽に安上がりな健康法ナンバーワンだと信じています。たまにはウォーキング部会の番外編で何処か近場の中世の土の城なんて如何ですか？ 最近では弟子も増えて、彼らの最初の時の「ただの山かと思ったら・・・」を聞くたびに嬉しくなるのです。

稲門祭、史上初のオンライン開催

笠谷興一朗（平成18年 文）

10月24日（日）、稲門祭が開催された。今年初のオンライン開催（インターネット上の配信形式）となった。毎年、卒業から一定の年数が経過した校友を招待する「ホームカミングデー」が稲門祭と同日開催される。私は昨年、このホームカミングデーの招待年次だった。コロナ禍のために昨年は中止となったため、今年に繰越となった。その今年もオンライン開催ということで、来年キャンパスで行われる式典にも出席できるそうだ。

当日はライブ中継で総長より祝辞が述べられた。自分の在学していた頃を思い出してみると、既にインターネットを利用した講義が一部導入されていた。当時は機能も少なく、現在の充実したコンテンツに比べれば、まさに既存文化を西洋風にアレンジした文明開化の過渡期のようなものだった。目黒稲門会の多くの先輩方が講義を受けていた風景、つまり伝統の教室形式と新たな時代のデジタル形式、その狭間を生きる世代という事になる。折しも大河ドラマで渋沢栄一が描かれているが、そうであれば我々が築く時代はどのようなものになるだろう。今回のホームカミングデーを二度目の卒業式として、そのような事に思いを馳せていた。

現役の学生達は課外活動に制限があり、しばらく彼らと校友会活動を通じて会っていない。それでも少し落ち着いた頃、彼らがアルバイトしている店に呼ばれて訪ねると、しっかり今できる事を積み重ねていた。青春を奪われた若者などと悲壮感を煽る報道も目にしたが、若い感性が生き抜く力はたくましい。この若さというのは決して年齢に限ったものではなく、この自粛期間をどのように過ごしたかによって、新しい何かを見出した人もいれば、大きく老いた人もいるだろうと思う。

コロナ禍の副産物と言えるのは、産業面や文化面でオンライン化の課題が浮き彫りになった事だろう。この一年、ほとんど会社に行く事なく、在宅で仕事をしていた。毎朝、菅刈小学校の児童が登校してくる声で目を覚ます。夕方になると賑やかになる。子供達はマスクもせず、手を取り合い、地面に転がり、校庭の遊具で遊ぶ。おそらく彼らの記憶に感染症による閉塞など少しも残らない。大人達の努力もあって、感染拡大抑制と経済活動の両立を目指し、デジタル革新は加速した。テクノロジーの進化は、これからは生活に大きな変化を与えていこう。しかし、人の歴史において不変のものは確かに存在し、次代に受け継がれていく事は間違いない。母校の後輩や地元の子供達を見て強く感じる事である。

スペイン巡礼の道を歩く：その3

吉野博明（昭和45年 法）

サンファン火祭り：リオハ州ナヘラ (Najera) の公園で。火祭りとはバーベキュー祭りのこと？



この日はサンファン（聖ヨハネ）の火祭りの日。この町ではバーベキューの火と煙で祝っているらしい。

巡礼の食生活あれこれ：

朝食 朝は7時前後に宿を出て4～5km先の集落に入ると8時くらいになる。そこでカフェ(バル)を探して、カフェコンレチェとクロワッサンの朝食を摂る。ご当地ではチュロス (Churro、スペインの揚げ菓子) とチョコレートが一般的な朝食だそう。



カフェコンレチェとクロワッサンの朝食
チュロス(チョコレートのカップに浸して食べる)

昼食 バゲットに生ハムや、チーズ・トマト・レタスなど普通の材料を挟み込んだボカディージョ (Bocadillo) をカフェで買って昼まで歩く。

下の写真はバゲット一本丸ごと生ハムを挟んだものだが、量が多い。普通は半分のものを買求める。朝、買い損ねても街中のカフェ、或いは広場にあるキッチンカーの売店で買って食べることもあった。



夕食 巡礼宿では自炊か、街の食堂で食べるのが原則のようだが、宿によっては夕食を出してくれるところもある。チェックイン時に宿の主人からメニューの案内があり、食べるかどうか聞かれる。勿論食堂付きの場合はそこで摂るのが便利だ。私は自炊しないので、宿の食事が無い時や、大きな町では街の探索を兼ねて、バルやレストランを探して夕食を頂く。

街中でも「巡礼メニュー」が間違いなくある。赤ワインボトル一本(何と一人でも一本つく)、前菜、メイン、デザートがついて、15～18ユーロ(2,000～2,300円)位。「やるき茶屋自由が丘店」より安い？！

右の写真はリオハ州ナバレッテ

(Navarete) のアルベルゲの夕食のパエリャ。何故かこの日は御馳走にありついていた。料理人さんと記念のクリック。



下の写真は街の食堂の巡礼メニューの例(リオハ州アソフラ(Azofra)の町で)



リオハワインの赤一本、前菜(野菜スープ)、豚肉のバターソテーとフレンチフライ、デザート。一人前。

バル スペインでは朝から昼はカフェ、夕方からは居酒屋として、バルは生活に欠かせない存在のようだ。以前ご紹介した通り、私の巡礼の旅はバルセロナのバルで「巡礼の道」を耳にしたのが切掛けだった。



トサントス(Tosantos カステイージャ・イ・レオン州)の村のバルで。タパス(おつまみ)を当てにビールを一杯。手前はイワシのマリネを、奥は茄子のソテーをパンに乗せたもの。六百円位。



ログローニョ(Logrono、リオハ州の州都)のバルで。生ハムとパンとツナサラダとビールで夕食。これで千円くらい。バルをはしごして、ビールにタパスでも追加すると、もうお腹一杯。

夕方になると、日中の暑さで干上がっているのとにかくビールが欲しい。バルに飛び込むなり「ポルファボール、ウナカーニャ！」(Por favor, una Cana 生ビール一杯、お願いっ！)を連呼することになる。食堂のメニューについてくる赤ワイン、本当に申し訳ないけど、渴いた喉にはまずビール。ワインは飲んでもグラス一、二杯が限度だった。(続く)

目黒わが町自慢

青葉台 泉 実紀子(平成3年 文)

青葉台は、旧山手通りを境に渋谷区と隣接し、旧山手通りの南西側の斜面に広がっている。国道246号線から代官山方面が青葉台1～3丁目。246を挟んで4丁目となる。南に傾斜する坂は道幅がゆったりとして、陽当たりもよく、歩いていても気持ちがよい。

中目黒駅と代官山駅、神泉駅が徒歩圏で、少し頑張れば、渋谷駅や池尻大橋駅にも歩ける。

西から南東方向に流れる目黒川の沿道は美しく整備され、桜の名所として有名である。

二丁目の高台付近は通称「西郷山」と呼ばれていて、これはかつて西郷隆盛の弟・西郷従道の邸宅があったことによる。邸宅跡付近は現在、西郷山公園や菅刈公園として開放されているが、このように整備されたのは実はそれほど昔の話ではない。

西郷山は、昭和初期には大事件の舞台となったし、戦時下は防空壕として利用されていた。その後も、いろいろに利用されたが、結局あまりうまくいかず、最終的にいまのような公園として整備されたと、町の長老に話を聞いたことがある。

そんな西郷山公園だが、目黒区を見下ろす景色はなかなかである。晴れた日には富士山も望めるし、近隣にはおしゃれなカフェやレストランもある。敷地全体が坂になっているので、園内をくまなく歩くのはけっこうハードな運動になる。

隣接する菅刈公園は、私が子供のころは国鉄官舎が建っていた。そこに住んでいた友達もいたので遊びに行ったこともある。いつの間にか現在のような公園になっていた。ここに西郷邸が建つ前、江戸時代は豊後国岡藩藩主・中川氏の下屋敷だったそうで、その回遊式庭園が一部復元されている。最近ではインスタ映えすると話題にもなっているらしい。

高級住宅街のイメージが強い青葉台だが、邸宅はおしゃれでモダンな新しい建物ばかりで、昔ながらの家はほとんどない。つまり、いま名所となっている前述の公園が象徴するように、その時代の世相そのまま写しとっている、時代の鏡ともいえる町、それが青葉台なのである。



西郷山公園
芝生広場

目黒の銭湯巡り

大塚湯 田添麻友(平成17年 政経)

今回でこの「目黒銭湯巡り」が最後となりますが、残る最後が私の家の近所の「大塚湯」とのことです。執筆を仰せつかまりました。「大塚湯」があるのは、かつて「和泉湯」もあった油面地藏通り商店街。この商店街の端っこに位置しています。私は「大塚湯」の前を歩いて家に帰ることが多いのですが、お風呂あがりにさっぱりとした様子で歩いている方を見るとこちらまでほっこりとした気持ちになります。

さて、執筆にあたり、久しぶりに訪れてみると、通常夜11時まで営業しているのですが、新型コロナの影響からか、10時頃には終わりますよとのことでした。そして「黙浴」のお願いの張り紙も貼ってありました。浴場に入ると、照明が明るく、湯気やきれいに磨かれたタイルを照らしていました。浴槽は1つで、ジェットバスが装備されていました。温度は45～46度でやや熱いと思いましたが、これが銭湯の醍醐味ですね。丸みを帯びた浴槽が特徴的です。小さな洗い場と浴槽は15人程でいっぱいになるかなと思うほどですが、私が訪れたときは他に3～4名ほどいらして、ほどよい距離感が保てていました。他のお客様は、日常的に利用されている様子で、この銭湯が生活に根付いていることがわかりました。

自分にはやや熱めのお湯で体が芯まで温まり、満足して銭湯を後にしました。その日は急激に寒くなった日でしたが、行きに感じた寒さが帰りは心地よかったです。私がよく見かけるさっぱりとした様子で家に帰る人になっていました。

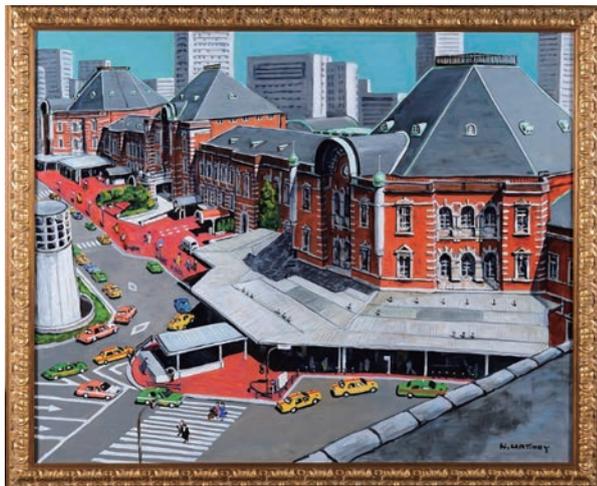
さて、最終回ということで、目黒区の銭湯事情について少しご紹介します。平成17年の目黒区議会議事録に、「区内の公衆浴場は現在25軒でございます。その年間利用者数も、昭和60年度当初の4分の1ほどにまで減っております。また、23区全体でも、自家風呂保有率の大幅な上昇と相まって、昭和60年当時と比べ公衆浴場数は半減し、公衆浴場利用者も4分の1に減少しております。」とあり、銭湯の急速な減少について記されていました。後継者が



いなくて惜しまれつつ廃業された銭湯さんもありました。今のうちに銭湯巡りしておきたいなと思いました。

会員ギャラリー

『旧東京駅』 油彩 F100
服部尚彦（昭和35年 理工）



最近では東京駅も周辺も様変わりしました。
今の新装復古された駅舎も、多分50年後になると
貫禄が増えて素敵になると思いますが、現在はモチーフ
として魅力を感じません。
旧作ですが、嘗ての駅舎が懐かしく思います。

『灯火』 油彩
澁谷瑠璃



長らく画家として活動していたが、昨年より音楽の要素を盛り込んで活動している。きっかけは一つの欲望からだった。
よく聞かれる事がある。「どんな思いで描いているのか」と。同じ質問を何度も受けると、答えも同じような内容になってしまい、何か一捻り出来ないものかと考えた。
絵の制作過程や作品への思いを詩にして、曲を作ろうと思った。ライブの際には絵も飾り、色と音の両方を表現している。
絵と音楽、遠いようで近い。絵を描く事が静かに自分の内面と向き合う時間だとしたら、音を奏でる事は自分以外の誰かと激しく繋がる瞬間だと思う。
永遠に静的な表現と、一瞬の動的な表現、どちらも大切。色も音も、絶望も希望も、ごちゃ混ぜなこの世界。やりたいことやっちゃえば、と思う。私は、そうすることにした。

新入会員

松方正彦（昭和59/61年理工 / 工研）
（目黒区碑文谷在住）



新制34回理工学部応用化学科卒業。
成蹊大学、大阪大学を経て、1997年より応用化学科に戻り教員をしています。現在は、エネルギー・環境問題解決のための化学を展開しようと、二酸化炭素の資源化やプラスチックのケミカルリサイクル技術開発などに取り組んでいます。校友会関係では昨年まで8年間、早稲田学報の編集委員を務めていました。また、ジャズ歌手としての活動もしており、都内のジャズクラブなどに出演しています。一日も早くコロナ禍が収束し、皆様と自由にお目にかかること、楽しみにしています。
大島俊輝（平成30年 人科）



（目黒区上目黒在住）
今年の2月に目黒に引っ越してきました。大学の時代は野球部に所属し、学生コーチを担当、野球漬けの毎日でした。現在の会社は2社目で、前職はJTBで教育旅行の営業担当に従事していました。コロナが落ち着きましたら、旅行部会でお手伝いできることもあるかと思います！早稲田に入学できたことも、野球部で4年間活動できたのも、色々な方とご縁があってこそだと思っています。稲門会でも、ぜひ先輩方とご縁を、早稲田の繋がりを大切にしていきたいです！若輩者ではありますが、何卒よろしくお願いたします。

お悔やみ申し上げます

河村 晋彦（昭51教育）令和2年9月12日（66歳）
安藤 虎雄（昭22理工）令和3年4月26日（93歳）
平沢 栄夫（昭31商研）令和3年5月18日（90歳）
阿部喜久雄（昭19商研）令和3年5月05日（98歳）
岩佐 好恭（昭34法） 令和3年7月15日（84歳）
※期間：令和2年9月1日～令和3年10月31日（敬称略）

編集後記

東京のコロナの新規感染者や死者は激減しました。まだまだ油断はできないのですが、なにやら一山こえた思いもします。

およそ2年にわたって目黒稲門会の部会活動も休止状態でしたが、ようやく再開が見えてきたようです。

来年1月の新年会は久々の対面開催の予定です。楽しみですね。
（猪名川 記）